

俳句シリーズ 4

人と作品

松井利彦著

正岡子規

松井利彦著

止岡 于規

松井利彦 著

俳句シリーズ 人と作品

著者との
協定により
検印廃止

正岡子規

俳句シリーズ・人の作品 4

昭和四十八年六月五日 印刷
昭和四十八年六月十日 発行

定価八〇〇円

著者 松井利彦

発行者 及川篤二

印刷者 株式会社 第一印刷

株式会社 桜楓社

東京都千代田区猿樂町二の二の六

電話(二九二)五六六〇一二

振替東京 一八〇二〇

3395-730640-0723

子規を源として、明治・大正・昭和の短詩壇に流れ込んだものは多彩であり、その影響の大きさは量り知れない。しかも、それが主に病床でなされたということも、人間としての大きな魅力となっている。

子規が私を把えてはなさないのはこの辺の魅力からである。こうした思いで調べ続けてきた子規研究の一部を、及川篤二氏の御好意で一書にすることが出来た。子規忌刊行の予定が遅れてしまったのは、この稿を作るに当って、改めて、子規俳論の総索引を作ったことによるもので、この点申わけないことと思っている。

この正岡子規が、他の人と作品シリーズと趣を異にしているのは、短歌の方で藤川忠治氏の『正岡子規』が刊行されており、そこには既に、子規の個人的な伝記も述べられていたからである。この辺、及川氏からのお話もあって、特殊な視点からの子規を眺め直すことに主眼をおき、「子規と西洋」に関する四篇を収めた。

最初、子規の初期の文学観が西欧的な文学観を受け容れ、影響されながら変貌してゆく道筋を捉えようとしたため、この四篇の他に「子規と旧派」、「子規と漢詩」、「子規と叙事文」を書き上げた。ところが、かなりな量となったため、結局、西洋との繋がりの深い四篇だけを収めることにした。このうち「子規と漢詩」は子規の漢詩が清国詩壇の影響を強く受けているということ、特に汪漁洋の作風

への関心を通し、文学の至境に神韻体を考えていたこと、又、叙景詩という觀念を漢詩から受けとめ、それが写生を受け容れさせる下地となったこと、又、「悟り」、仙境といった東洋的な理想が一つには蕪村の離俗を肯定させたことなどを記したものでこの論は子規と西洋を考えるに当って、東洋、西洋と対比しつつ西洋を捉えた、その側面として特に愛着の強いものであったが、思い切って割愛した。

この辺を御諒承頂いた上で各論をお読み頂けたら幸である。

鑑賞篇は、作品を生み出した周辺、俳論、個人的事情などを絡み合わせて、一句を考えた。全体の体裁を補う意味を含めたからである。

全体からいえば、子規没後の年譜を付し、又、索引を特に詳しくしたりしたがこれは、最初に私が意図した子規研究を何らかの形で浮び上らせたいと考えたことによる。

最後になってしまったが、この稿を書くに際して、資料、その他に関して特に、山口誓子、和田茂樹、正岡忠三郎先生に、稿の細部について根岸正純先生に御世話になったことを記させて頂いて私の感謝の気持としたい。又、刊行に当っては及川氏をはじめ、道坂春雄、松原嘉代氏のご高配を頂いたことも忘れられないことである。

昭和四十一年十二月

松井利彦

目

次

まえがき

作家研究篇		七
-------	-------	---

子規と西洋(一)	短詩肯定		九
----------	------	-------	---

Philosophy of style

子規と西洋(二)	美の規範		二七
----------	------	-------	----

—実学からの脱皮—

子規と西洋(三)	新詩創造		五七
----------	------	-------	----

—終末感覚の自覚—

子規と西洋(四)	写真とその展開		七九
----------	---------	-------	----

—空間、写真、写生—

鑑賞篇	九
-----	---

選句抄	101
-----	-----

紀行篇	113
-----	-----

柿二題

御所柿	115
-----	-----

ツリガネ	119
------	-----

参考文献	115
------	-----

年譜	114
----	-----

索引	119
----	-----

作
家
研
究
篇

子規と西洋(一) 短詩肯定

“Philosophy of Style”

子規は「我が俳句」(『世界の日本』明治二十九年八月)中で、「我の一時西洋の事物を尊崇したるや、其反動は終に西洋を輕侮し、日本の事物をのみ尊崇するに至り、其結果は美術文学の上にも及べり、頓て年を経るに従ひ、美術文学の嗜好には邦土古今の区別消滅し、只々美不美の二あるのみとはなれり」と述べている。これは、明治二十九年頃になって、日本、西洋という(表面的な)区別を超えた美の規準をもち、その規準を基にして美術文学を考えると、子規の芸術的立脚点を明らかにしたものに他ならないのであるが、それでは、子規の成長期にあつて、「一時西洋の事物を尊崇した」時期は、明治何年頃に當るのであるうか。そして、子規は、この西洋尊崇によつて何をえたのであるうか。

子規と西洋の關聯を考える最初としてこの辺のことから眺めてみようと思う。

まず、子規の西洋、並びに西洋的なものへの關心について調べてみると、「自笑文庫」中の「明治十一年」の項中、「洋犬の説」で、和犬と洋犬とを對比、「和犬ハ只山獵の助トナリ、夜盜ヲ警ムルノ功アルノミ。然レドモ、洋犬ハ人ノ水中ニ溺ル、ヲ救ヒ、或ハ寒國ニ於テハ旅人ノ大雪ニ埋没スルヲ助ケ、或ハ之ヲ使役シテ、櫓ヲ挽キ、書ヲ致ス等、枚挙スルニ遑アラズ。」「洋犬ノ和犬ニ勝ル幾何ゾ。洋犬ノ功亦大ナル哉。」と記し、観念的に洋犬の優秀さを述べている。これは、年齢からいえば、

十二歳（數え年）にすぎず、自らの判断など凡そ認められないものであるが、しかし、西欧尊崇の第一歩であることを認めてよいであろう。同じ「自笑文庫」中の「明治十二年」の項中には、「遊学中洋行を勧められ故郷の母に相談之文」があり、そこでは、「友人之勧めに任せて洋行致し、博く西洋各国の事情を知り、将来に至り此聖恩に応へ度候。」との文字を見せている。この「自笑文庫」は、勝山小学校時代の作文集であり、「遊学中……」の文も、そうした際の課題と思われるが、ここでは日本をよくする方途としての西洋への関心を明らかにしている。このような傾向は同じく「教育ハ国家ノ基礎ヲ成ス論」中に「主上ノ厚恩ニ報ユルノ心ヲ保存シ、外国ニ信ヲ失ハズ」と見えており、明治十五年には、英米の書が我が国に来てから文化が頓に開けたという考え方（十月二十二日三並良宛書簡）となり、十八九年には、英語の小説もかじり読みするようになってゆく（「筆まかせ」小説の嗜好 二十年）のであつて、これが次第に、心酔という状態になってゆくことは明治初年の風潮と考え合せてみて、当然のことであつたといえる。

ところで、これと逆な西洋心酔に対する反省を、子規の発言を通し眺めてみると、それは、明治二十六年頃からで、この年には、「日本人にして欧米に心酔せる欧米的日本人に至ては、固より軽躁浮薄の輩敢て論ずるに足らず」（「春色秋光」日本 明26・10・26日）といい、文学そのものについては、「西詩の複雑と国詩の簡潔は両立して不可なるべし」（「文学雑談」早稻田文学 明26・1）という風に、我が国古来の詩の価値を、西欧の詩と同じ価値で考え、「曲亭翁の小説は」「五七言錯綜の裏に詩歌的の雅趣を添へたり。是等は西洋に例なしとて以て排斥すべきか、寧ろ日本独得の妙技として外邦に対して誇揚すべきには非るか」（同上）と述べて、日本的なものの価値を積極的に説いてみせるよ

うになっている。

この傾向は次第に強められて、二十七年には、「極端の西洋派は曰く、人間なきの畫は畫に非ず。人間なきの文学は文学に非ずと。何が故に人間は文学の上に必要なるか。何が故に天然は文学たるの価値なきか」「文学は直接に吾人が感覚に訴へて快樂を生ぜしむべき美術の一種なりとせば、其快樂を起すべき天然が何故に文学たらざるか。況んや天然より起す所の快樂が必ずしも人事より起す者に比してわからざるをや。」（『文学漫言』日本 明27・7・26日）という文学觀として示され、天然を對象とする文学傾向を日本的なものとし、その価値づけを試みている。

二十八年には、西洋崇拜に対する反省はいよいよ強まり、俳句作家として必要な教養として、「俳句以外の文学にも大体通曉せざるべからず。第一和歌、第二和文、第三小説、謡曲、演劇類、第四支那文学、第五欧米文学等なるべし」（『俳諧大要』日本 明28・12・23日）と述べて、西欧文学の序列を五番目とし、別に「西洋がいかにも有難きものにや、西洋を知らぬ我等には少し分りかねたれども、何でも彼でも西洋といへば有り難がる輩の気の知れぬ事よ。ある人は文学を『韻文』『散文』の二つに分ち某の文は韻文にもあらず散文にもあらず故に文学にあらずとて之を打ち捨てしことあり。今の西洋好きの人の論は皆此類のみ。」「我国在来の文学をも押しつぶしてこは西洋の文学に似よりなしなどといひつつ其の言葉に輕蔑の意味を帯ばせて鼻うごめかす人のおろかさよ」（『棒三昧』日本 明28・12・21日）として、西洋心酔者を愚者と断ずるようになってゐる。

このことは、子規の西洋心酔の期間が明治十五六年から明治二十五年迄位の十年間であつたことを物語っているのであるが、更に、子規の幾つかの文章にあらわれた、西欧の文学者、哲学者、詩人そ

の他、西欧的な学問等々をとり出し、表を作ってみると（二十年迄は不明）、

明治二十一年には、近代詩、審美学、ナポレオン、スコット、リットン、スペンサー、

二十二年には、韻を用いぬ詩（ブランク・ヴァス）、スペンサー、ヘンリー・リード、ミルトン、

二十三年には、スコット、リットン、ゾラ、ベーコン、ケプレル、ガリレオ、ターレス、ニウト

ン、コパニカス、ヘラクリタス、ハクスレー、ヴント、ダーウイン、スペンサー、ソクラテ

ス、カント、アリストートル、クライヴ、ゲーテ、ホエートレー、シルレル、エマーソン、ナポ

レオン、プラトー、ハルトマン、ヘンリー八世、エリザベス、エラスマス、モア、

二十四年、無韻の詩（ブランク・ヴァス）、英国最古の詩の一つ、スペンサー、

二十五年、シエクスピア、ミルトン、

二十六年、バーンス、バイロン、マホメット、キリスト、サウセー、

ということになる。

勿論、これは子規が、文中で示した名前、その他をとり出したものであつて、子規自身がこれらの作家につき、或いは人々についてどの程度正確な知識をもっていたかとか、深い理解をもっていたかという事とは関係ない。が、しかし、少くとも、西欧に対して抱いていた関心の強さを示す手がかりとなるもので、これによれば、二十一年、二十二年、二十三年と心酔度が高まり、二十四年、二十五年とそれが薄れていったと言う事が出来るであらう。

それでは、このように、子規の注意をひいた西欧の諸文学者、哲学者、その他の人々の中で、短詩型作家としての子規に、最も強い影響を与えたのは誰であつたらうか。

それは、この表でも二十二、二十三、二十四年にわたって名前が示されることがからも覗えるように、スペンサーの影響が、俳人、歌人子規を形成する根底に極めて重要な働きかけをしている。

スペンサーというのは、Herbert Spencer (1820～1903) のことで、イギリスの哲学者でダービー生れ、鉄道技師から経済新聞の記者となり、ベイコン以来のイギリス経験論の集大成ともいえるべき総合哲学体系 *A System of Synthetic Philosophy* を樹立した哲学者で、自然科学万能の風潮を背景とし、とくにダーウィンの「種の起源」(on the Origin of Species 1859) の、生物進化論を継承しつつ、物理、心理、社会、倫理の諸原象を組織的に叙述しており、こうした論は一八七〇年代以降において驚くべき普及をみせる。

文章に関しては、自らの体系「第一原理」(First Principle 1860～1862) から演繹し、実証科学としての文章心理学を展開、具体的にはエネルギーの経済(エコノミー)の原理の応用^④で、言語及文章は相手の注意を支配する方向に集中的におこなわれなくてはならぬが、その場合相手のエネルギー消費をできるだけ少くしてやれることが主眼だといった考え方を見せている。

スペンサーの論が我国に入ってくるのは明治十年^⑤で、尾崎行雄訳の「権利提綱」が刊行され、十五年には、乗竹孝太郎訳の「社会学之原理」が刊行され、次第に一般に受けいれられてゆくのであるが、子規がスペンサーに親しむのは、その主著作、*A System of Synthetic Philosophy* ではなくて、文章論、*Philosophy of Style* 一書にすぎなかったようである。

ここで子規と、スペンサーとのつながりについて記してみると、子規は「筆まかせ」の明治二十一年の「哲学の発足」中で、「余は哲学を志すにも拘らず、詩歌を愛すること甚しく、小説なくては夜

が明けぬと思ふ位なりき」。「何故に哲学といひ詩歌小説といふが如き全く反対の者を、両立し難き者を（なぜ反対と思ひしかといふに、哲学者は四角四面なる者にて文芸の末枝などに区々たるものにあらざる、僧侶が小説を作りしことなく、スペンサーが詩歌(四)を作りし話をも聞かざればなり）同時に好むかをかしく思へり。」と述べている。

これは、明治二十一年頃の子規の志向が詩歌小説の創作という面と、論理的に現象を分析してゆくという二つの面をもっていたことを示しているのであるが、その前者が、スペンサーが試みなかったという理由で否定的に扱われていることは、子規のスペンサーへの傾倒を端的に示したものと見るこゝとが出来る。

この、スペンサーへの傾倒、哲学への志向ということから、参考までにこの頃までの子規の志向の変移について述べてみると、詩人、学者、政治家、哲学者という四つになる。

最初の、詩人になろうと考えるのは明治七年頃、数え年八歳の頃で、「何故か(四)詩歌を好む傾向を現はし」「詩はどんなものとも知らず」「早く年を取りて詩を作る様になりたし(四)と思」っている。ここに、詩人歌人となる要素が潜んでいたものと思われる。

この後、外祖父の大原観山から、「余(四)の幼なる時も汝程は遊ばざりし」と言われて「多少の感触を起し」「後來学者となりて翁の右に出でんと思」ったことがあったと記しているので、学者になるうとする志向も或る期間はあったと見てよいであらう。

しかし、子規の内部で伸長せしめられてゆくのは、その詩人的資質で、明治十一年初めて漢詩を作